

令和 4 年 5 月 7 日現在

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究(A) (一般)
 研究期間：2016～2020
 課題番号：16H02040
 研究課題名(和文) 歴史社会学の理論・実証の蓄積の再構築と新しい研究教育法の開発に関する総合研究

 研究課題名(英文) Comprehensive research for re-organizing the heritage of sociological theories and surveys toward the new disciplinary method

 研究代表者
 佐藤 健二 (Sato, Kenji)

 東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

 研究者番号：50162425
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 26,200,000円

研究成果の概要(和文)：歴史社会学の研究領域の厚みをあきらかにし、その存在形態の多様性や、方法の特質を共同研究として発掘し検討した。対象のなかに存在する歴史性を方法として使いこなす「メチエ(職人的の方法知)」として次世代を育成する基礎を、データベースの構築、ハンドブックの制作、先駆的な研究者のテキスト空間のフィールドワークなどを通じて、共有地としてつくりあげることが目指された。主要概念と事物に焦点をあわせた『文化資源学講義』、質的データ論の可能性を描きなおした『真木悠介の誕生』、比較-歴史社会学の研究の拡がりを示した『社会の解読力』は、その成果の一端である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 過去の社会・文化を対象とすれば歴史社会学であるという通俗的誤解を、現実に社会学のなかで試みられてきた研究の蓄積を検討するなかで退け、社会史や比較社会学や現代社会論の可能性とも響き合う、可能態としての歴史社会学をそれぞれの立場から描きなおした。歴史社会学は、都市研究や文化論や社会意識論等々の社会学の多様な分野を貫く方法性において成りたつ。理論的・認識論的对象である「社会」に不可避の歴史性を正面から見ずえ、調査技術に固定化した方法意識を流動化することが、新時代の社会学の研究教育に不可欠であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Thorough elucidating the depth and thickness of historical sociology, we have examined the diverse forms of its actual appearance and the unique qualities of their methodology. We attempted to establish the foundation of arts education as common milieu in which researchers will learn the method to unearth the obscure historicity in their own research targets. This common milieu would involve organizing archives or databases, editing the handbook, and investigating the space of the text written by the pioneer scholar. It is a part of our achievement that the books entitled “Lectures and Essays in Cultural Resource Studies,” focusing the main categories and things, “The Birth of Yusuke Maki: A Comparative historical sociology of Human Liberation,” discussing the possibility of the theory of quality of data, and two volumes of “Deciphering Force of Society,” showing wide scope of cultural historical sociology.

研究分野：歴史社会学

キーワード：歴史社会学 社会調査史 社会学方法論

1. 研究開始当初の背景

(1)「歴史社会学」は、1990年代から2010年代のなかばにいたる20数年のあいだに、論文数においても研究者数においても、良かれ悪しかれ増大し膨張した研究領域であった。本研究は日本の社会学において、ひとつの新しいジャンルを形成しつつある。しかしながら、学史的には1930年代からつづく、この「歴史社会学」の研究の断片的で断絶的でいささか見とおしにくい蓄積を、あらためて新たな視点から網羅し、忘れられた方法論的な特質や固有の達成を多角的に検討することをつうじて、その現代的な意義を明確にする必要があった。

(2)現代の社会学において、ただただ「過去の」社会や、「かつての」文化のありようを歴史として参照し、論じていけば「歴史社会学」だという平板な理解が存在しているのも、事実である。残念ながら「歴史社会学」をめぐる論議は、「社会学とはなにか」を問いなおす深さにおいて、本格的にはなされてこなかった。そのことが、都市社会学・家族社会学・教育社会学・産業社会学のような形での個別の専門性を帯び、固有の理論的対象をそなえたかにみえる下部領域を、良きにつけ悪しきにつけ形成していない理由ともなっていた。

(3)この課題の根底には、現代社会において「社会」と名指すべき人びとの絆やシステムが衰弱しているのではないかという危機感がある。その背後には、若者たちのなかの「社会」感覚の変容、「公共性」の構造転換や「他者」関係の変化とも通底する問題がある。それは社会学のさまざまな個別領域に限定される課題ではない。「社会」もまた「想像の共同体」であって、人びとが社会的なるものを感じ、公共的なるものを考える、そうした意識の存在形態と不可分である。それは質問紙調査でとらえられる意識の水準ではなく、人びとの生活実践のなかに身体的で日常的な想像力として潜む。そのあらわされにくい領域の歴史的な厚みを探り知ろうとする試みこそが、社会学の構想力であり調査の実践だったからである。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、もういちど「社会学とはなにか」の本質的な問いを、豊かな拡がりをもって共有するための原点を、この学問に関心をもち発展させようとねがう人びとに、あらためて創造的に提示することである。日本のみならず世界の社会学研究のなかで、主題に対するある種の視野狭窄の断片化と、研究領域の私化・個室化が進んでいる。そうした研究状況の閉塞を打破し、理論的・認識論的対象である「社会」に不可避の歴史性を正面から見すえ、調査技術に固定化した方法意識を流動化することが、新時代の研究教育には不可欠である。

(2)具体的には、以下のような3点の目標にまとめることができよう。

A. 多様な展開をしめした近代日本における「歴史社会学」の理論と実証の成果を、その理論枠組みの特質や方法論的な問題点もふくめて一覧できる学史的なデータベースを構成すること

B. そうした系譜の厚みの検討のなかから、Bourdieu風に表現するなら「歴史社会学のメチエ(経験に根ざす職人的な方法知)」とも呼ぶべき方法論に裏付けられた実践的な社会学的想像力を立ちあげる能力を、社会学の今後の研究法の教育に活かすこと

C. 国際的にも個性ある展開をしめしている各国の「歴史社会学」の特質を比較し、「社会問題」あるいは社会の危機に対処する知としての社会学の存在意義を現代において示すこと

この試み自体が、社会学の可能性を提示する新しい学術場の設定を意味する。たんに方法論としての学知の整理だけでなく、現代の情報メディア利用の具体的な手法の開発をめざしているのである。

3. 研究の方法

(1)本研究の主目的を達成するための方法、あるいは研究計画として、大きく以下の3つの課題領域をあげることができよう。

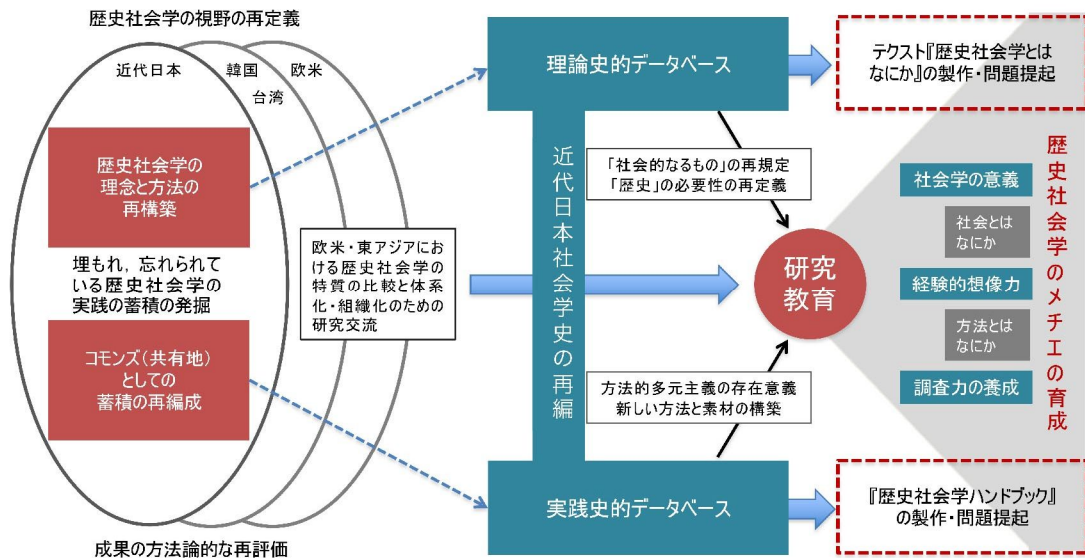
第1の方法は、近代日本の歴史社会学の研究成果の整理であり、コモンスとしてのデータベース化である。そこでのデータベースの作成は、研究成果の歴史社会学的な性格づけに依存するもので、機械的なデジタル化の力仕事ではない。前提となる分析が、問題意識・理論枠組・方法論・資料収集の手法・資料処理の特質・分析概念・図表等々の活用のしかた・説明の特徴・二次分析の可能性などの論点からのデータ化に及ばざるをえないことを考えたうえで、それぞれの視点を活かした共有の方法が工夫されなければならない。研究者へのヒアリング調査なども必要となるし、個人をフィールドとしてとらえるようなケース・スタディも試みられてよいと考える。

第2の方法は、近代日本の歴史社会学の系譜を描き出すことであり、ある意味で社会学史を書きなおすことである。そこでの学史は、理論の発展史だけにとどまらず、方法史ともいべきデ

一々の収集や、資料の社会的存在形態の解読の過程もふくむ総体的な歴史認識となるだろう。また系譜の描き出しは一国の社会学史にとどまることなく、国内外の研究者との研究交流等による国際的で比較社会的な視点を内包したものとなるのはいうまでもない。

第3の方法は、社会学の存在意義 (raison d'être) を高らかに示し、その研究の必要性と、教育の大切さを説くとともに、じっさいの歴史社会的な研究実践の自己教育や学習に役立つツールを開発することである。具体的な形態としては、さまざまなものが考えられ、すでに述べた解題目録やアカデミックコモンズの形成もそのひとつであろう。しかしながら、本共同研究としては、すでにいくつか公刊されている論文集的な歴史社会学の概説ではなく、多様な技法を見わたすことができ、またさまざまな資料の社会的存在形態についての知識も得ることができる、総合的なソースブックやハンドブックの作成に向けて、準備を進めたいと考えた。

(2) 以上のプロセス全体をかんたんに図示すれば、以下のようになる。



研究計画の第1の課題について、近代日本の範囲ですら、社会学の現在中心主義のなかに埋もれ、忘れられている歴史社会学の実践の蓄積は、農村や都市、家族、産業、社会意識、文化、福祉等々の複数の専門領域からの知恵を集めずには発掘できない。文庫作業の第一段階が研究論文や調査分析実践のリスト化であるとするならば、第二段階においてはすでに述べたような解題目録をめざし、概要をつかむことは不可欠である。この作業は、大学院生たちの労力を借り、データベース化の基礎となりうる工夫を加える必要がある。しかしながら、それはすでに述べたように歴史社会学の理念や方法の再定義という作業と不可分であるため、研究代表者を中心とした研究会が指導し管理すべきであろう。

図では、重なりあう楕円において韓国・台湾をはじめとする東アジアの歴史社会学の展開や、アメリカ・ヨーロッパの蓄積を暗示しているが、それはむやみに対象を広げることを意味しているわけではない。むしろ、一国単位に切り分けることができない、グローバルな構造的な特質の共通性への視野を確保しておくことに主眼がある。

第2の近代日本の歴史社会学の系譜を描き出しという課題は、研究をささえる理念・理論的枠組みと、資料の蒐集や分析をふくむ実践の特質との二つの側面を意識しつつ進めた。

そこにおいて、第一に既存の歴史社会学論や、日本における社会学史研究の認識が検討されざるをえないのはいうまでもないが、第二にその学史を描き出す前提となった資料群の存在形態もまた視野に入れた考察が必要であろう。具体的なひとつとして東京大学に所蔵されている、明治初期の社会学導入のプロセスを実証するために集められた貴重書や、戸田貞三が設置した社会調査室からの継承資料などがあげられる。そこにおいて、歴史社会学の系譜の発掘は、「社会調査史」の構築と響き合う。

第3の研究教育における「歴史社会学のメチエ」の確立・育成という課題は、まだ具体的に見とおせる成果ではない。しかし、入門書としての『歴史社会学とはなにか』と、ソースブックとしての『歴史社会学ハンドブック』への集約は、わかりやすい目標であろう。

ただしこの共同研究では、歴史社会学における資料の社会的存在形態の多様性を自覚しつつも、コンピュータの発達と普及およびインターネット等による画像共有の技術的な可能性の拡大を踏まえた「教材」の資源化に取り組もうと考えた。しかもかつて社会心理学や社会学の一部で試みられた架空の情報に基づいた練習用・実験用の教材ではなく、歴史社会学的な視座を積

極的に活かし、実際の社会的な現実から切り取られた記録・資料を素材とした教材の開発が、社会調査法の技法教育においては、とりわけ有効であると考えている。いわゆる「二次分析」はその現実性を質問紙調査票の資料性と数量的なデータの局面で実現したが、質的な調査研究とその教育においては、そうした二次分析とは別次元での課題と向かい合わなければならない。

4. 研究成果

(1) 第1年度は「歴史社会学」の研究の蓄積を網羅し、その存在形態と、それがどのように論じられ認識されてきたかを把握するという基礎作業を中心に研究会活動を進めた。

とりわけ Bourdieu 風に表現するなら「歴史社会学のメチエ(経験に根ざす職人的な方法知)」とも呼ぶべき方法論に裏付けられた実践的な社会学的想像力について、それぞれの研究フィールドから素材を出しあった。なかでも、戦後社会学をリードしてきた作田啓一や見田宗介の著作についての検討などにおいては、研究者の資質・方法の違いもさることながら、時代や世代の文脈をたねんに把握することの重要性など、今後につながる論点を多く提出された。戦後日本の社会科学を再出発であった政治学者らの軍国主義の精神構造や天皇制国家の分析についても、同時代の「思想の科学研究会」の戦争期や戦後社会の現実分析や、社会学のなかで固有に展開した「近代化」論の試みなどをにらみつつ位置づけてみると、見田宗介の「社会心理史」や「存立構造論」などを、あらたな歴史社会学的分析として意味づける視座がえられた。

いわゆる社会史のインパクトを受けて、1990年代あたりから簇生するようになった、ライフヒストリーやエスノグラフィーを名のる社会学の歴史把握についても検討を進めた。

社会学方法論および社会調査論のテキストにおける歴史性の把握もひとつの課題であったが、本年度は戦争社会学の領域において検討を進め、合宿の研究会として成果としての「教科書」についての素案を練り上げた。

(2) 第2年度の研究プロジェクトにおいて大きく進んだのは、最終的な成果のひとつである、この分野での「教科書」づくりの基本的な構造について、これまでの研究の蓄積を一覧するとともに、方法論の多様性や主題の広がり配慮しつつ、一定の体系性を備えた構成が見え始めたことである。教科書・テキストとして果たす役割についての議論が進み、執筆分担者としてなにが貢献できるかを論じながら、第1素案としての目次構成を検討してきた。

このプロセスにおいて、近代日本で実施された社会調査の報告書の前提となっている地域の歴史性の分析、戸籍に始まり国勢調査等にいたる官庁における社会把握の歴史社会学的な位置づけ、社会学方法論および社会調査論のテキストにおける歴史性の把握、フィールドワークや聞き書きでとらえられてくる歴史の説明の報告書への繰り入れ、社会学研究で使われた視覚資料(地図、写真など)など、研究会が課題として掲げてきた多岐にわたる領域が具体的に探究されつつある。

また研究の国際的な広がりについては、韓国の歴史社会学的な動向について研究交流を通じてその知見が蓄積し、今後活かす目処が整いつつある。さらに繰り越して実施したオーストラリアでの国際交流研究会は、当主題を進めるにあたっての国際的なネットワーク整備に大きな一歩となった。南オーストラリア大学の City West Campus において開催された「NEW PERSPECTIVES ON THE DIGITAL REVOLUTION: MEDIA AND CULTURAL TRANSFORMATIONS」と題したシンポジウムにおいて、メディアの現代の変容がいかに社会文化の理解や社会学の教育研究において大きな意味をもつかが論じられた。

(3) 第3年度の研究プロジェクトにおいて大きく進んだ方向性として、2点をあげることができる。

一つは、昨年度事業の繰り越し実施で行われたオーストラリアの阿德レードでの国際研究交流集会などを踏まえて、メディアの歴史的・現代的変容と深く関係させつつ社会学研究の方法論を再検討する必要性を掲げる本研究の、国際的な意義の検討が進んだことである。とりわけ、日本社会だけでなく、グローバルな現代社会の変容において、その観察・記述・分析において社会学がいかなる方法論的なツールを開発しているのかを反省的に捉えなければならない課題が浮かびあがってきた。その方法論的な意義をもつツールには、「AI」というマジックワードで括られてしまっているものを含めたさまざまな電子テクノロジーが包含されていると同時に、感性や言語を内蔵した調査者/被調査者の身体もまた含まれる。いわば、グローバルであると同時にローカルな課題が明らかになりつつある。

二つ目に、この研究プロジェクトの成果として、力を入れて進めてきた「教科書」と位置づける入門書もしくはハンドブックの作成が軌道に乗りつつあることである。「歴史社会学」への招待として、いかなる解読の想像力が歴史社会学と論じうるのかを、いくつかの主題・テーマ・専門領域においての研究者自身の解説において提示するとともに、蓄積されてきた資料やデータをどのように活用しうるかという「ハンドブック」的・実践的な性格についても、工夫が検討された。研究代表者が本年度の実績のひとつとしてまとめた『文化資源学講義』は、実際には歴



史社会学的な発想で貫かれており、基礎理論編において「文化」「資源」「情報」といった概念の基礎を根底から問いなおし、演習・実習編では具体的な対象である「新聞錦絵」や「万年筆」といった事物を取りあげ、分析をどう立ち上げるかを論じている。「教科書」構想の参考となるだろう。

(4)第4年度に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大の予断を許さない状況が続いたために、海外において計画していた調査・資料収集はまったく実施できなかった

が、その代わりにリモートの通信環境等を活用しての研究交流については、一定の成果があった。

年度当初の研究実施計画において掲げた「社会意識論の領域で展開してきた「社会心理史」や「存立構造論」などあらたに意味づけなければならない歴史社会学分析」や「家族社会学や地域社会学で蓄積されてきた研究」などの発掘・収集においては、大きな進展があった。研究代表者をはじめ、研究分担者のそれぞれが、それらを踏まえて論文としての発信を用意しつつある。とりわけ研究代表者は、社会調査史のうえで重要な役割をいまも果たしている「定量分析/定性分析」「数量的研究法/事例研究法」「数量的データ/質的データ」の学史的な再検討にはじまり、「社会意識論」「人間解放の理論」「未来構想の理論」「コミュン論」「比較社会学」「現代社会論」等との関係を細かく分析するなかで、歴史社会学の検討の新たな可能性を感じている。

教科書づくりのプロジェクトに関しても、リモート会議等を通じて、これまで方向性を決めてきた導入篇・ガイドブック篇・ハンドブック篇・ブックガイド篇の内容の構想および部分的な執筆を進めつつある。とりわけ、導入篇のところで提示しようとしている、それぞれの研究者個人としての歴史社会学のおもしろさの経験的な提示は、「教科書」の形式をすこしはみ出して、独立の論考にまで発展しつつある。その点はあえて設定の形式に押し込めることなく、研究の展開として、教科書にこだわらない活かし方も検討している。

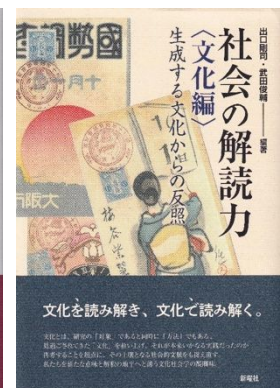
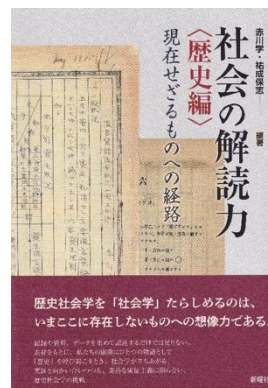


(5)第5年度の研究実績としては、これまで4年間において取り組んできた歴史社会学、社会調査史、社会学諸分野での方法論の展開をめぐる資料的な基礎研究をふまえて、共同研究参加者がいくつかの中間的な成果を刊行物として共有するかたちでとりまとめた点が特筆に値する。

そのひとつが、研究代表者による『真木悠介の誕生：人間解放の比較=歴史社会学』にとりまとめられていく研究の展開であり、その制作プロセスにおいては、いくどかにわたる本共同研究の会合での報告と討議が活かされている。とりわけ、この著作の材料となった「見田宗介=真木悠介」という社会学者の研究諸領域をつらぬく業績資料の調査研究は、本共同研究においても議論された「フィールドとしての個人」という主題をじゅうぶんに展開したものであると同時に、「質的データ」「社会心理史」「存立構造論」「比較社会学」などの論点をつなぐ「歴史社会学のメチエ（経験に根ざす職人的な方法知）」を浮かびあがらせるうえで、貴重なケーススタディとなった。

もうひとつが、4名の研究分担者が編者となり、さらに広く本共同研究の参加者がそれぞれの成果を寄稿した『社会の解読力 歴史編』『社会の解読力 文化編』の2冊である。この論集において、たとえば「流言」というとらえにくい対象を資料とした歴史社会学の方法や、制度論と集団論の両輪で研究手法を磨いてきた家族社会学、アメリカにおいて発展してきたハウジングの社会調査の歴史の特質からなにが学べるかが論じられ、身ぶりという非言語的なデータの歴史性の探究や、オペラ上演のようなパフォーマンスの歴史の変容にいかに向かえば、またコミュニケーション的な民衆理性をとらえる言語政治学の枠組みをいかに構築するかなどが模索されている。

コロナ禍の影響で、実証的な検証の局面や海外を含む調査研究は制約されたが、その反面、時間をかけての研究が進展した。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計32件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 16件）

1. 著者名 赤川学	4. 巻 24
2. 論文標題 ソーシャル・キャピタルは川崎市地域包括ケアシステムの構築に役立つか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 米村千代	4. 巻 31巻2号
2. 論文標題 『家族社会学研究』2010年以降の展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族社会学研究	6. 最初と最後の頁 221-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi, Deguchi.	4. 巻 23/2019
2. 論文標題 Post-Truth Politics as a Pathology of Normalcy: Beyond Alienation and Narcissism in the Age of Globalization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Fromm Forum	6. 最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野上 元	4. 巻 193
2. 論文標題 （書評論文）「石原俊『群島と大学 - 冷戦ガラパゴスを超えて - 』」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 149-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野上 元	4. 巻 2
2. 論文標題 戦争映画の社会学のために 塚本版映画『野火』を題材として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 祐成保志・三浦倫平	4. 巻 21号
2. 論文標題 社会調査教育における混合研究法の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会と調査	6. 最初と最後の頁 84-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 祐成保志	4. 巻 93巻8号
2. 論文標題 住居への退却、まちの再生	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新建築	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 54集
2. 論文標題 社会学・農村社会学の研究動向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報村落社会研究 イエの継承・ムラの存続	6. 最初と最後の頁 298-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 23
2. 論文標題 書評 齋藤柱著『1933年を聴く 戦前日本の音風景』NTT出版、2017年	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東由美子、時実象一、平野桃子、柳与志夫	4. 巻 Vol.3, No.1
2. 論文標題 我が国における地方紙のデジタル化状況に関する調査報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.2.2_140	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤雅浩	4. 巻 54(1)
2. 論文標題 The diffusion process of the concept of trauma in contemporary Japan, 1990s-2000s	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要 (教養学部)	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健二	4. 巻 第33集
2. 論文標題 凌雲閣十二階から何が見えたか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京都江戸東京博物館調査報告書 浅草地域のあゆみ -近代化と盛り場の変容-	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤川学	4. 巻 11号
2. 論文標題 構築された性から構築する性へ ジェフリー・ウィークスの理論的変容を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代社会学理論研究	6. 最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤川学	4. 巻 68巻1号
2. 論文標題 社会問題の歴史社会学をめざして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 118-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 赤川学	4. 巻 40巻3号
2. 論文標題 少子化問題における計画のゆくえ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 計画行政	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤川学	4. 巻 第64巻 668号
2. 論文標題 承認問題としてのセクシュアリティ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 青少年問題	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本直美	4. 巻 第655号
2. 論文標題 ミュージカルによる戯曲の解釈と表現 - 『老貴婦人の訪問 Der Besuch der alten Dame』における音楽構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 22-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野上元	4. 巻 13
2. 論文標題 歴史が聞こえてくること : 方法的ラディカリズムと歴史への愛	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 270
2. 論文標題 都市祭礼における対抗関係と見物人の作用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 265-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 9
2. 論文標題 再解釈される『伝統』と都市祭礼のダイナミクス	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 63
2. 論文標題 コモンズとしての山・鉾・屋台をめぐる社会関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 民俗芸能研究	6. 最初と最後の頁 75-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 21
2. 論文標題 書評 永井純一著『ロックフェスの社会学：個人化社会における祝祭をめぐって』2016年	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 祐成保志	4. 巻 100巻8号
2. 論文標題 消費・生産・参加：「住まう」ことを支えるとは	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊福祉(全国社会福祉協議会)	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 祐成保志	4. 巻 98号
2. 論文標題 住生活の再建と仮設住宅	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 都市住宅学(都市住宅学会)	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東由美子	4. 巻 No.342
2. 論文標題 E1997 デジタルアーカイブ学会,その趣旨と展望	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 カレントアウェアネス-E	6. 最初と最後の頁 E1997
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 29号
2. 論文標題 都市祭礼における周縁的な役割の組織化と祭礼集団の再編ー長浜曳山祭におけるシャギリ(囃子)の位置づけとその変容を手がかりとしてー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 80-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 15号
2. 論文標題 都市祭礼における社会関係資本の活用と顕示 - 長浜曳山祭における若衆たちの資金調達プロセスを手がかりとして -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 18-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 28号
2. 論文標題 都市祭礼におけるコンフリクトと高揚ー長浜曳山祭における山組組織を事例としてー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 生活学論叢	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤裕治・船戸修一・武田俊輔・祐成保志	4. 巻 8号
2. 論文標題 地域との関係の中で形成される放送人のアイデンティティ-NHKのラジオ・ファーム・ディレクター (RFD) の聞き取り調査から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 82-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田俊輔	4. 巻 21号
2. 論文標題 書評：周東美材著『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』岩波書店、2016年	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 出口剛司	4. 巻 45(6)
2. 論文標題 「ポスト真実」における社会学理論の可能性 - 批判理論における理論の機能を手がかりにして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 234-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健二	4. 巻 202号
2. 論文標題 「柳田国男「明治三十九年樺太紀行」再読」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『国立歴史民俗博物館研究報告』	6. 最初と最後の頁 243-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計37件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 15件）

1. 発表者名 Yonemura, Chiyo.
2. 発表標題 Comment for ' Fantasy and Agony of International Marriage: Stories of Korean Men '
3. 学会等名 The 2018 KFSJ-JSCFH Joint Conference " Intimate Relationships: Korea-Japan Comparative Perspective " (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takeshi, Deguchi.
2. 発表標題 Post-Truth Politics as a Pathology of Normalcy: Beyond Alienation and Narcissism in the Age of Globalization
3. 学会等名 Second International Erich Fromm Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野上 元
2. 発表標題 「学徒」と「学生」：学徒動員の記憶
3. 学会等名 シンポジウム「学生たちの戦後：矢内原忠雄と東大学生問題研究所から見た1960年安保前後の学生像」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NOGAMI GEN
2. 発表標題 Cultural Aspects of Postmodern Military in the Case of Japan Self Defense Forces
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shunsuke, Takeda.
2. 発表標題 Succession and Reconstruction of Festivals/Folk Performing Arts in Overaged and Depopulated Communities:Focusing on the Role of Mediator between Inhabitants, out-Migrants, Incomers, and Volunteers.
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 長浜曳山祭における諸アクターと地方都市の社会的ネットワーク：都市祭礼をめぐるcommons論の観点から
3. 学会等名 第8回山・鉾・屋台研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 「いま危機にある無形文化遺産 無形民俗文化財の休止・廃絶・継承をめぐる」コメント
3. 学会等名 第13回無形民俗文化財研究協議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平野桃子、柳与志夫、東由美子、数藤雅彦
2. 発表標題 我が国における地方紙のデジタル化と活用の促進に向けた課題抽出：法制度的・倫理的、社会的、技術的、経済的・制度的な課題について
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第3回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤雅浩
2. 発表標題 精神医学的知識の普及と医療専門家の役割に関する研究
3. 学会等名 第91回日本社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Involvement in Chorus: Collective Feeling and Alfred Schutz's Theory
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 赤川学
2. 発表標題 日本のセクシュアリティを振り返る
3. 学会等名 日本「性とこころ」関連問題学会第9回学術研究大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Akagawa, Manabu.
2. 発表標題 A natural History of Low Birthrate Issues in Japan since 1990s
3. 学会等名 Society for the Study of Social Problems 2017 Annual Meeting, Session132 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村千代
2. 発表標題 家訓の歴史の変遷と現代的意味について
3. 学会等名 第18回「東洋思想と心理療法」研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米村千代
2. 発表標題 現代社会における「家」の変容 世代間継承意識の現在
3. 学会等名 ファミリービジネス学会研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池岡義孝・石原邦夫・藤崎宏子・米村千代
2. 発表標題 ラウンドテーブル 『家族社会学研究』30年の歩み
3. 学会等名 第27回日本家族社会学学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本直美
2. 発表標題 劇場から音楽シーンへ / 音楽シーンから劇場へ
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第29回大会ワークショップC「ポピュラー音楽と劇音楽」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto.
2. 発表標題 Singing Together: Choruses and Alfred Schutz's theory of musical communication
3. 学会等名 13th Conference of the European Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本直美
2. 発表標題 ミュージカルにおける戯曲の解釈と表現 - 『老貴婦人の訪問 Der Besuch der alten Dame』における音楽構造
3. 学会等名 日本演劇学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sukenari, Yasushi.
2. 発表標題 Aging and the concept of fair housing in the Japanese context
3. 学会等名 From Room to Region : Age-Friendly Environmental Design and Planning in the Western Asia-Pacific (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 コモンズとしての都市祭礼：『曳山』とその管理システムを手がかりに
3. 学会等名 第65回関東社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤裕治・舩戸修一・武田俊輔・祐成保志
2. 発表標題 NHK『ふるさと通信員』の遺したもの 長野県・三重県を事例として
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2017年度秋季研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 祭礼の危機と担いのしくみ (5) 都市祭礼における山車の管理システムの再編をめぐって
3. 学会等名 第90回日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤雅浩
2. 発表標題 ヒステリーと神経衰弱概念の普及に医療専門家が果たした役割について
3. 学会等名 科学社会学会第6回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤雅浩
2. 発表標題 精神疾患言説における戦争と神経 近代日本の新聞報道を中心に
3. 学会等名 埼玉大学人文社会科学系研究科学際系2017年度連続シンポジウム・ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takeshi Deguchi
2. 発表標題 Healing power and Artificial intelligence: How can an animal type robot have a mind?
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kenji Sato
2. 発表標題 How Our Perception of Others is Changing: Focusing on Communication via Mobile Phones
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasushi Sukenari
2. 発表標題 Toward a Sociology of Condominiums
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Gen Nogami
2. 発表標題 Cultural Aspects of Postmodern Military in the case of Japan Self Defense Forces
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naomi Miyamoto
2. 発表標題 Gendered Body on Stage: The Takarazuka Revue Company and Japanese Subculture
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shunsuke Takeda
2. 発表標題 Sustainability of Festivals and Rural Community: Focusing on the Role of Amenity Migrants in Depopulated and Overaged Village
3. 学会等名 International Workshop, New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 都市祭礼における競合関係と観客の作用ー長浜曳山祭の子ども歌舞伎(狂言)へのまなざしを手がかりにー
3. 学会等名 第89回日本社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 船戸修一・武田俊輔・祐成保志・加藤裕治
2. 発表標題 NHK農事番組の制作をめぐるポリティクス
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2016年度秋季研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 武田俊輔
2. 発表標題 『裸参り』考—都市祭礼における対抗関係の生成とオーディエンスの役割—
3. 学会等名 第64回関東社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 野上元
2. 発表標題 歴史が聞こえてくること - 方法的ラディカリズムと歴史への愛 「保苅記念シンポジウム—いまあらためて「保苅実の世界」を探る」第二報告
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第14回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 出口剛司
2. 発表標題 戦後社会の生成と価値の社会学 - 初期作田における『近代の超克』を手がかりにして
3. 学会等名 日本社会学理論学会大会（特別セッション「作田啓一の社会学」）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮本直美
2. 発表標題 共に歌うことの社会学 - - 集合的記憶と集合的感情
3. 学会等名 神戸大学シンポジウム「歌と文化的記憶 - 表現と社会」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Naomi, Miyamoto
2. 発表標題 Theatrical Gender Image and 'Takarazuka Revue': The first 2.5D musical company
3. 学会等名 9th Midterm Conference of the ESA RN-Sociology of the Arts (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 佐藤健二	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 311
3. 書名 文化資源学講義	

1. 著者名 赤川学	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 382(349-363)
3. 書名 清内路の地域力を比較する / 吉田伸之編 『山里清内路の社会構造』	

1. 著者名 祐成保志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 214(161-179)
3. 書名 住宅研究というフロンティア / 住総研(編) 『未来の住まい: 住宅研究のフロンティアはどこにあるのか』	

1. 著者名 祐成保志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 連合総合生活開発研究所	5. 総ページ数 104 (35-52)
3. 書名 日本型ハウジング・レジームの転換 / 連合総合生活開発研究所 (編) 『弱者を生まない社会へ : ベーシック・サービスの実現をめざして』	

1. 著者名 赤川学	4. 発行年 2018年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 176
3. 書名 少子化問題の社会学	

1. 著者名 米村千代	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 290(213-235)
3. 書名 家族社会学における家族史・社会史研究 / 藤崎宏子・池岡義孝編著 『現代日本の家族社会学を問う 多様化のなかの対話』	

1. 著者名 出口剛司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 235(225-235)
3. 書名 エーリッヒ・フロム 『悪について』 の新訳に寄せて / エーリッヒ・フロム著 ; 渡会圭子訳 『悪について』	

1. 著者名 祐成保志	4. 発行年 2017年
2. 出版社 萌文社	5. 総ページ数 222(43-50)
3. 書名 住宅研究と社会学の協働：「予言の自己成就」をめぐる / 中島明子編『Housers (ハウザーズ)：住宅問題と向き合う人々』	

1. 著者名 祐成保志	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 287 (277-287)
3. 書名 訳者解説 / 祐成保志訳『イギリスはいかにして持ち家社会となったか』(Lowe, S., 2011, The Housing Debate, Policy Press.の全訳)	

1. 著者名 祐成保志	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 362 (97-125)
3. 書名 住宅とコミュニティの関係を編み直す / 宮本太郎編『転げ落ちない社会：困窮と孤立をふせぐ制度戦略』	

1. 著者名 赤川学	4. 発行年 2017年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 196
3. 書名 これが答えだ！少子化問題	

1. 著者名 市川秀之・武田俊輔編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 おうみ学術出版会	5. 総ページ数 294
3. 書名 長浜曳山祭の過去と現在：祭礼と芸能継承のダイナミズム	

1. 著者名 野上元	4. 発行年 2016年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 283 (233-275)
3. 書名 第5章 自殺に対応する一さまざまな現場、無意識の協働 / 貞包英之・元森絵里子・野上元 『自殺の歴史社会学 - 「意志」のゆくえ』	

1. 著者名 野上元	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 248 (37-68)
3. 書名 第2章 大衆社会論の記述と「全体」の戦争－総力戦の歴史的・社会的位格 / 好井裕明・関礼子編 『戦争社会学 - 理論・大衆社会・表象文化』	

1. 著者名 出口剛司	4. 発行年 2016年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 398 (40-74)
3. 書名 第1章 戦後社会の生成と価値の社会学 - 作田啓一における『近代の超克』とその社会学的展開 / 奥村隆編 『作田啓一vs. 見田宗介』	

1. 著者名 米村千代	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280 (233-252)
3. 書名 第7章 家族研究と公共性 / 金子勇編『計画化と公共性』	

1. 著者名 米村千代	4. 発行年 2017年
2. 出版社 千葉大学大学院人文社会科学研究所	5. 総ページ数 66 (55-63)
3. 書名 東北日本の「家と村」を考える 細谷昂『家と村の社会学 - 東北水稲作地方の事例研究』(御茶の水書房,2012年)を読む / 米村千代編『地方都市におけるコミュニティ形成・醸成についての調査研究(人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書317集)』	

1. 著者名 Yonemura, Chiyo	4. 発行年 2016年
2. 出版社 IJSS 2016	5. 総ページ数 310(143-149)
3. 書名 'The Development of Organic Farming and Family Change in Postwar Japan', Proceedings of the 7th Indonesia Japan Joint Scientific Symposium (IJSS 2016)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	赤川 学 (AKAGAWA Manabu) (10273062)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	
研究分担者	出口 剛司 (DEGUCHI Takeshi) (40340484)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	米村 千代 (YONEMURA Chiyo) (90262063)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授 (12501)	
研究分担者	中筋 由紀子 (NAKASUJI Yukiko) (60303682)	愛知教育大学・教育学部・教授 (13902)	
研究分担者	宮本 直美 (MIYAMOTO Naomi) (40401161)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	野上 元 (NOGAMI Gen) (50350187)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	武田 俊輔 (TAKEDA Shunsuke) (10398365)	法政大学・社会学部・教授 (32675)	
研究分担者	祐成 保志 (SUKENARI Yasushi) (50382461)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	佐藤 雅浩 (SATO Masahiro) (50708328)	埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授 (12401)	
研究分担者	東 由美子 (HIGASHI Yumiko) (00307985)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・特任講師 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Workshop "New Perspectives on the Digital Revolution: Media and Cultural Transformations"	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------